

## 研究論文

## 高等養護学校における性教育に対する教諭の認識

永谷 智恵・工藤 恭子\*・矢野 芳美・岩佐 有子

(2013年12月25日受稿)

**抄 録：** 本研究は、高等養護学校における性教育の実態と課題を明らかにする目的で、性教育を担当する教諭に半構成的面接を行い意味内容を分析した質的記述的研究である。その結果【性被害を危惧】【反復・継続の教育】【性教育への熱い信念】【実態と時間数との狭間のジレンマ】の4つのカテゴリーが抽出された。教諭は生徒の身に起こる性被害を危惧し、性教育への熱い信念を持ち、生徒に反復・継続の教育を行っていた。しかし、生徒の実態と性教育の時間の狭間でジレンマが生じていた。限られた時間の中で、生徒一人ひとりの実態に合わせ、生徒の行動変容につながるような教育方法、教諭間の共通理解と寄宿舎との連携が課題とされた。

## I. はじめに

文部科学省<sup>1)</sup>は、1999年に学校における性教育の基本的な考え方として「自己の性の認識の確立、人間尊重男女平等の精神に基づいた豊かな男女の人間関係、性の諸問題の対処能力の育成」とし、障がいがある児童生徒に対する性教育の目標は、基本的に障がいがない児童生徒と同じであると述べている。そのうえで、障がいがある児童生徒には、障がいの状態や程度に応じて障がいを克服し、共に生きる社会の一員としての自覚を高め、社会的自立を促すことが大切であり、目標を障がいの種別や状態に応じて設定する必要があると述べている。さらに進め方として「学校における性教育は、常に子どもたちの実態等を的確に把握し、社会の変化などにも十分応答しつつ、特定の「教科や領域としてではなく、学校教育全体を通じて効果的に進められるようにすることが大切である」としている。

知的障がい児の性教育の必要性は、養護学校・特別支援学校の教師や保護者、施設職員への調査<sup>2-5)</sup>で明らかとなっている。木全らの調査<sup>6)</sup>においても、性教育の実施状況は、知的障がいの養護学校の3割が全く行っていない、知的障がい児施

設の7割が取り組んでいない結果であった。養護学校の9割以上の教職員は知的障害児の性教育が必要と答えていたが、4分の1は性に関する教え方が分からないと答え、性教育の必要性を認識しているが実施出来ていない状況が伺えた。

そこで、性教育を実施、推進する必要性を感じ、北海道内の高等養護学校における性教育の実態と課題を明らかにする目的で研究に取り組んだ。

## II. 研究方法

1. 研究デザイン：質的記述的研究デザイン
2. 協力者：北海道内の特別支援学校に勤務して性教育を担当した経験があり、インタビューの協力への同意が得られた教諭。
3. データ収集期間：平成25年10月から11月
4. データ収集の方法：半構成的面接  
インタビューの視点は性教育の実施内容、生徒の反応と評価、性教育に対する困難点、性教育に対する教諭の考えや思いなど
5. データ分析：面接内容を逐語録に起こし、1文節を意味内容が損なわない程度に1記録単位として切片化した。さらに意味内容の類似性と相違性を比較検討しながら、サブカテゴ

リー、さらに抽象度を上げてカテゴリー化した。カテゴリー化された内容と結果について、協力者に確認を得て信頼性と妥当性を確保した。

6. 倫理的配慮：北海道内の特別支援学校（盲・聾学校，病弱，肢体不自由を除く）39校の学校長宛てに郵送で「性教育に関するアンケート，インタビュー協力及び教材撮影の承諾」を依頼した。依頼時に本研究の目的および研究方法，結果の公表，研究協力と中断の自由性，学校名，氏名等の匿名性，守秘性の確保について文書及び口頭にて説明し，書面にて同意を得た。

尚，本研究は北海道文教大学人間科学部教育と研究に関する倫理審査委員会の承認を得て実施した。（承認番号 25003）

### Ⅲ. 結果

インタビューの協力の承諾が得られたのは，A高等養護学校5名であった。

1. 協力者の属性：男性2名，女性3名で保健体育教諭3名，養護教諭2名であった。

性教育経験年数 6年から12年

2. 生徒の概要：言語発達遅滞，注意欠陥多動性障害，軽度発達障害，広汎性発達障害，アスペルガー症候群，軽度知的障害，自閉症，軽度発達遅滞等，重複障害あり。ほとんどの生徒が寄宿舎で生活している。生徒数80名強  
男女比は男子2：女子1

3. 性教育の内容：学年毎，理解力に応じて3グループに分け，「心理・生理的内容」では性の発達，生命誕生，性交・妊娠など。「社会的内容」では性被害・加害防止，パーソナルスペース，自分を守る方法など。実施担当者は保健体育の教諭である。

方法はスライド，実演，体験，ロールプレイング，手作りの教材（一例，図1図2）

4. インタビュー所要時間：合計3時間（一人平均30分から50分）

5. データ：分析により得られた記録の素材は，記録単位数148，抽出されたカテゴリーは4つ，サブカテゴリーは29であった。（表1）

以下，カテゴリーは抽象度の高い順にカテゴリー【 】，サブカテゴリー〈 〉で示し，代表的なデータを「斜体」で示し，伝わりづらい内容は（ ）で言葉を補足した。



図1（手作り教材）粘土で作成した胎児



図2（手作り教材）エプロンシアター 子宮、胎児

教諭は，生徒たちの日頃の性への関心については＜興味ある，恥ずかしい＞様子を呈する，＜嫌悪感，マイナスイメージ＞があるが，全体的に＜ピュアな生徒＞が多いと認識していた。しかし，その生徒の中に＜切りなく女の子に近づく，体に触る＞，触れられても＜反応しない，拒否しない＞様子から＜性被害につながる心配＞を抱き，特に障がいの程度が＜中間層から軽度の生徒のリスクが高い＞と認識し，生徒の身に起こる【性被害

表1 高等養護学校の性教育に対する教諭の認識

サブカテゴリー	カテゴリー
言って、聞いて、見せて、体験させて、認める(13) 日常生活の中での変化がみえた(10) グループ分け、実演、ロールプレイで教える(6) 教諭間の共通理解と寄宿舎との連携(6) 繰り返し繰り返し教えていく(5) 性教育の柱は養護教諭(5) 素直にオープンに表出できる(4) 長いスパンで見えていく(3) 教材を作る(3) オープンに話す(2) 他の教科、日常生活とも関連して指導する(2)	反復・継続の教育(11)
性被害につながる心配(8) 切りなく女の子に近づく、体に触る(7) ピュアな生徒(5) 中間層から軽度の生徒のリスクが高い(4) 嫌悪感、マイナスイメージ(3) 興味ある、恥ずかしい(3) 反応しない、拒否しない(2)	性被害を危惧(7)
性教育の時間数が絶対的に少ない(10) 理解につながらない、浸透しない(7) ひとり一人の実態に合わせた教育の難しさ(7) 納得できるように伝えられない(5) 生活に密着した理解につながらない(3) 小学校からの性教育の基盤の必要性(3) 特別支援だからこそ性教育が必要(7)	実態と時間数との狭間のジレンマ(6)
しっかり、正しく教える(6) 性教育の最後のチャンス(4) 知らなかったでは済まされない(3) 実際の場面で使えるように教える(2)	性教育への熱い信念(5)

を危惧】していた。

・(性教育前) 女子に触るというのを特別何か・・・悪いこと(の意識)ではない、普通に友達にさわっている感覚で、気づいたら手をつないでるという感じ。

・相手を怖がらせてしまうので、勘違いもありますが、勘違いされると、その子にとっても不利益。

・簡単になんか距離(パーソナルスペース)とかを理解できない子とか、覚えることの出来ない子に、性被害につながってしまう心配が常にある。おいでと言われて、ついて行ってしまわないか・・・とか、身体を触られているということに対して、もしかして相手は悪意がある手荒な感じかもしれない、それを本人が気付かないと思う。

・身体を触られるのはおかしいよという事とか、どうにか自分から触らないでくださいと言えるようになれないかな・・・と・・・難しいところですね。

性教育の実際については、中心となり計画やア

ドバイス<教材を作る>など<性教育の柱は養護教諭>が担い、保健体育の教諭が生徒の理解力・実態に合わせ<グループ分け、実演、ロールプレイで教える>。授業中や日々の生活の中でも<言って、聞いて、見せて、体験させて、認める><オープンに話す>方法を取り、その後の生徒の様子は、パーソナルスペースがとれるなど<日常生活の中での変化が見えた>や隠さずに<素直にオープンに表出できる>等の行動変容につながっていた。単元内だけでの教育ではなく、学校内の<他の教科、日常生活とも関連して指導すること<教諭間の共通理解と寄宿舎との連携>が必要、そして生徒の行動に結びつくまでには<長いスパンで見えていく><繰り返し繰り返し教えていく>ことで、性教育は【反復・継続の教育】であると認識していた。

・(出産の過程がわかるような、最初の受精卵からだんだん大きくなって行くというのをエプロン

シアターでというのもありましたし、実際に本物とはいかないですけど、おなかの中の赤ちゃんが育つまでにどれくらいの大きさなのか、グラムも重さも大体同じ大きさを紙粘土等を使って作ってもらった。プリントだけではなくて、かたちになった物があることで、より生徒の理解につながった。

・性教育は年に3回、学期に1回行っているんですが、それを勉強したことを常に授業だったり、日常生活の中で「勉強したよね」と何回も言っていないと入っていかない。

・(生徒には) 家族以外はプライベートゾーンを触るのはおかしいね。この人は家族?と聞くと『違います』と答えるので、触られたらおかしいと思わないとだめだよと話している。

教諭は性被害を受けやすい子どもたちであるという特性から「特別支援だからこそ性教育が必要」>、性被害が起きてしまってから「知らなかったでは済まされない」>、学校で教えられる「性教育の最後のチャンス」<「しっかり、正しく教える」> <「実際の場面で使えるように教える」>と【性教育への熱い信念】を持っていた。

・特別支援って普通校よりも支援が多い子がいる学校であって、それは普通校より(時間数が)少なくてはたして3回やる意義という所が読めない、付け焼刃的な情報を与えられたら・・・意味がない

・(性の被害・加害) そうならないために、最後のここは学ぶ所の砦かなと思ってる。教える教えないはやはり、変なマスターベーションを覚えて厄介になる子はやはりいるから。しかし(自立に向けて、理解力の) 高い子に関しては全部教えないと、やっぱり出た時(卒業後)に痛い目見るのはそっちなというのがあるので。

・でもやっぱり、その時(授業中)は恥ずかしくても現実は突き付けていかないと、それを知らないまま出して(卒業)しまって、「知らなかった」ですまない所の最低限を教えるのかなという感じでした。

さらに、教諭は、性教育が生徒の「理解につな

がらない、浸透しない」<「納得できるように伝えられない」> <「生活に密着した理解につながらない」>ことから「一人ひとりの実態に合わせた教育の難しさ」>を感じ「小学校からの性教育の基盤の必要性」>があること、生徒の実態から「性教育の時間数が絶対的に少ない」と認識し【実態と時間数との狭間のジレンマ】を抱えていた。

・だからといって一番強い(生徒に印象に残る)のは実体験だと思う。性体験の実体験は正直厳しいことだと思うから、時間をかけてやって、その部分は大事かなと思うけど、3回だとやってるかやってないかわからない、2時間なので特に座学が難しい子たちだから・・・

・(性教育を) やってる先生は、やりたい、もっとやってほしいとか、(時間が) 足りないなという思いは持っている。せっかく教えたのに覚えてなかったんだろうとか言葉が出たら、うちの学校のスタンスって3回しか教えてないんで、こっちの非があるんじゃないのかなって、ジレンマですわね。

#### Ⅳ. 考 察

##### 1. 性被害が危惧される生徒の気になる行動

教諭は、日頃の生徒たちの気になる行動として、「切りなく女の子に近づく、女性に興味がある、体に触る」「気づくと手を握っている」、触られていても「やめてくださいとも言わない、拒否しない」などがある。山本<sup>7)</sup>は「体に触れる、抱きつく、他人に触ろうとする」行為は、親しい人とのスキンシップを求める自然な人間としての心情であると述べている。他人の体に触れる行為も第二次性徴を迎え表面的な身体の変化に気づき、自分や異性の身体に関心を示すことで起こり、発達段階の過程でみられる自然な行為である場合が多い。しかし、身体的性的機能の発達に比べ精神的発達や社会的発達が未熟であり、危険を回避する能力や自制する判断力が乏しく、教諭の問題意識が高くなっていると考えられる。

教諭がそのような問題意識を持っているのは、

異性に興味を示す思春期の性の正常な発達と捉えながらも、「親しい人でもプライベートゾーンを守ること」、「触られることに対して家族でない人は拒否する」ことがわかること、「お尻にゴミがついていても、声をかけ相手の意思を聞いてから取る」こと等、生徒達に具体的な情報を正しく伝え、伝えられたことが正しく理解し行動できることを重視しており、教育的指導の必要性を考慮しての結果であると考える。

また、教諭の過去の体験から「妊娠騒動があった生徒がいた」「ストーカーと誤解されるような行動がみられる子がいる」「車から声をかけられると付いて行ってしまう」など、教諭は生徒に性被害・性加害が現実に関わり得る危険性を強く認識しており、性教育の重要性を示す結果となっていた。

性教育は性の問題行動を回避する手段としてではなく、人間の生き方に関わる教育、よりよく生きるための社会教育<sup>8)</sup>という理解のもとで進められる。教諭は語りの中でも「素晴らしいこと、生きる教育」であると、性教育の意義を意識しながらも、性教育の重要性を高く認識するがゆえに、生徒の実態と教育の時間数の少なさの狭間でジレンマが生じ「間違いがあっては遅すぎる」「正しく教える、実践できなきゃ意味がない」「3回しか教えてないからこちらに非がある」と教育の責任を強く感じ、養護学校における性教育の重要性をさらに強調する結果になった。

## 2. 性教育の実際、反復・継続の教育、教育の困難さ

教諭は生徒の理解度に応じてグループに分け、言って、聞いて、見て、体験させ、認める、繰り返し繰り返しの指導が行われていた。自作教材も工夫しながら提起され、熱心な指導を行っている実態が明らかになった。このような熱心で、反復・継続的な指導により、生徒は日々の生活の中で「だんだんパーソナルスペースを取るようになってきた」等、生徒の日常の行動から教育効果を実感と

して認識していた。

その一方で、「なかなか納得するまで教えられない」「理解したかどうか、分からない」等の指導方法やその効果に不明瞭さがあることが挙げられ、教諭は生徒に適した教育の具現化と評価に困難さを伴っていることが示された。つまり、性教育の指導方法に戸惑いと不安を抱えながら、日々指導に当たっていることが考えられる。

性教育を実施する際の困難については先行の調査報告<sup>9-11)</sup>があり、教育を担当している教諭の課題にもなっているのが現状である。

教育の場において、教諭はその場その時の状況、生徒の反応により、教材や教育方法を変化させて指導している。養護学校における教育の困難さは、生徒の身体発育が一様ではない<sup>12-13)</sup> ことに加え、知的障害の状態や精神的発達の違いから個人差が大きく、障がいの状態に応じて重点化と個別化を図るなど指導や教材に多くの工夫を必要とする。性教育の教諭の抱える困難さは生徒の反応を瞬時に読み取り、その場に応じて変化させて伝えていく教育力・指導力がより高く求められている結果であると考えられる。今後の性教育推進のためには教育方法や教材等の対応策を検討する必要性が示唆されている。

## 3. 全教諭の連携、専門職である養護教諭が柱

教諭は教育内容や生徒の指導に対し「共通理解が図れればそんなに困ることはなかった」「皆それぞれ仕事を抱え、担任の考えも（別に）ある、共通理解するまでに集まる時間もかかる」「寄宿舍との連携もすごく薄い（略）もう少し壁がとっばらえれば連携できて、1人の子どもを見るならそこが大事だ」と述べ、生徒に関わる教職員の共通理解と連携の必要性を認識しながらも、多忙で時間がかかることや壁があることで連携が薄い現状があることを課題として認識していた。

先行研究においても、学校全体で話し合われていることが少ない、共通理解が図れている学校と担当者任せの学校がある<sup>14-17)</sup>。性に関する教育

の価値観のズレや共通理解ができない場合、性に関する教育が全体的に、消極的、逃避的になりがちで抽象的、理念的、場当たりの指導になる<sup>18)</sup>。生徒が将来、地域で自立して生活するためには、子どもに関わる教職員の共通理解を図り、同様に指導が行えることは重要課題であると考えられる。

平成21年度施行の学校保健安全法では、養護教諭の役割について、中心として学校保健活動推進に当たる中核的な役割、校内外の関係者との連携においてのコーディネーターの役割<sup>19)</sup>が明記され、養護教諭は関係教職員等と連携した組織的な保健指導の充実を図る重要な役割として位置づけられている。研究協力者である養護教諭の方々も、コーディネーターとして中心的役割を担い活躍されていた。今後の性教育の推進にあたり、教諭間、寄宿舎の教職員、更には地域の支援者とも連携及び共通理解を得るためには、養護教諭の専門性を重視し、性教育の柱となり組織作りをしていくことが更に重要となっていると考える。

## V. おわりに

高等養護学校における性教育の実態と課題について述べてきた。

性教育の実践はまだまだ一歩も踏み出せないでいる実践現場はたくさんある<sup>20)</sup>中で、研究協力していただいた高等養護学校の教諭の皆さまの熱心な教育姿勢に大変感銘を受けた。

本研究結果は、研究協力者が少なく一般化には限界があるが、インタビューで語られた全ての言葉が大変貴重なデータとなった。今後も養護学校における性教育の推進に向け、関係者とも協力し共通理解を図りながら教育方法や教材の開発及び研究に取り組んでいきたい。

## 謝 辞

本研究のインタビューに快く協力していただきました高等養護学校の教諭の皆さま、研究開始にあたりご指導いただきました札幌教育委員会、学

校教育部、前野紀恵子様から心から深謝申し上げます。

## 文 献

- 1) 文部科学省:学校における性教育考え方. ぎょうせい. 進め方, 東京, 1999.
- 2) 木戸久美子, 林隆, 中村仁志, 藤田久美, 芳原達也: 知的障害を持つ子どもの性に関する親の意識についての研究—親と子どもの性差による比較—. 発達障害研究, 26 (1): 38-51, 2004.
- 3) 江田裕介, 田川元康, 松本美穂: 障害児の性および性教育に対する教師の意識. 上越教育大学障害児教育実践センター紀要, 6: 19-27, 2000.
- 4) 木村龍雄, 尾原喜美子: 障害児学校の性教育に関する教師の意識—養護・聾・盲学校の全国調査—. 高知大学教育学部研究報告, 1 (55): 147-158, 1998.
- 5) 西田充潔, 田実潔: 知的障害児に対する性教育について—養護学校における指導の現状と教員養成カリキュラムの必要性の検討—. 北星論集 (社), 42: 75-86, 2005.
- 6) 木全一也: 障害のある子どもと障害のあるひとたち. セクシャリティ, 19 (1): 32-35, 2005.
- 7) 山本直英: 心とからだの主人公に障害児の性教育入門. 53-64, 東京, 大月書店, 1994.
- 8) 林真由美, 荒木田美香子, 大橋一友: 知的障害を持つ成人男性の性のニーズと性知識に関する調査. 発達障害研究, 30 (2): 121-127, 2008.
- 9) 児嶋芳郎・細瀬富夫: 知的障害特別支援学校における性教育実践の現状と課—全国実態調査の結果より—, 埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター紀要, 10: 2011.
- 10) 井上京子, 菊池圭子, 遠藤恵子: 特別支援学校の児童生徒の性に関する調査—教員を対象として—, 山形保健医療研究, 13, 83-94,

- 2010.
- 12) 入江仁士, 木村龍雄: 障害児学校における性教育の必要性について—養護・聾・盲学校における教師および養護教諭を対象にした全国調査より—, 思春期学, 17 (3): 351—359, 1999.
- 13) 田村泰文: 障害児 (者) のセクシャリティを育む人間と性教育協議会・障害児サークル編. 39—41, 東京, 大月書店, 2001.
- 14) 大友久雄: 障害児と思春期. 産婦人科治療, 84 (2): 155—158, 2002.
- 15) 原恵美子: 知的障害児に対する特別支援学校における性教育実施の状況と, 教諭と保護者の意識, 治療教育学研究, 30, 61—69, 2010.
- 16) 10) 同上
- 17) 菅沼徳夫, 生川善雄: 中・軽度知的障害児の性教育に対する特別支援学校教師の意識—教師への聞き取り調査を通して—, 千葉大学教育学部研究紀要, 30: 159—165, 2012.
- 18) 河田史宝, 佐藤春香: 知的障がいのある児童生徒に対する性教育—教職員と保護者に対する調査から—, 金沢大学人間社会学域学校教育学類紀要, 4: 15—29, 2012.
- 19) 16) 同上
- 20) 岩崎信子: 学校保健安全法と養護教諭—学校の保健と安全のしくみ—, 母子保健情報, 65: 10—13, 2012.
- 21) 児嶋芳郎: 新版人間の性の教育—人間発達と性を育む障害児・者と性, “人間と性” 教育研究協議会, 32—41, 東京, 大月書店, 2006.
- 22) 川上ちひろ, 辻井正次: 思春期広汎発達障害児の性行動の特徴と保護者のニーズの検討, 小児の精神と神経, 49 (2): 163—170, 2009.
- 23) 大久保賢一, 井上雅彦: 自閉症児・者の性的問題行動に関する保護者の意識—親の会への質問紙調査から—発達障害研究, 30 (4): 288—297, 2008.
- 24) 児嶋芳郎: 東京都教育委員会の障害児に対する性教育に関する政策動向と課題, 学校教育学研究論集, 23: 45—53, 2011.
- 25) 柳澤志萌, 綿祐二: 性の知識の習得過程に関する研究—知的障害児と健常児における比較検討, 文京学院大学人間学部研究紀要, 10 (1): 229—241, 2008.
- 26) 松川里美: 青春を輝かす養護学校高等部の性教育, 障害者問題研究, 25 (4): 358—363, 1998.
- 27) 児嶋芳郎: 知的障害養護学校における性教育実践の教育課程への位置づけと課題, 障害者問題研究, 33 (3): 231—239, 2005.
- 28) 児嶋芳郎: 知的障害児に対する性教育における教材研究・授業づくりの基本的視点の検討, 障害者問題研究, 38 (4): 259—267, 2011.
- 29) 山田志保, 是永かな子: スウェーデンにおける知的障害児に対する性教育—イエーテボリ市およびパティレ市での聞き取り調査をもとに—, 高知大学教育学部研究報告71: 171—177, 2011.

## Teacher Concerns in Sex Education at High Schools for Disabled Students

NAGATANI Tomoe, KUDO Kyoko, YANO Yoshimi and IWASA Kumiko

**Abstract:** The objective of this study is to understand the situation and problems related to sex education in high schools for disabled students by conducting semi structured interviews with teachers in charge of sex education at such a school. The data obtained in the interviews were analyzed into the following four categories: "apprehensions about sexual violence", "repeated and continuing education", "strong beliefs in the value of sex education", and "dilemmas arising from perceived student needs and the number of class hours". Teachers conducted sex education repeatedly and continuously to the students with a strong belief in the necessity for sex education and with apprehension about the danger of sexual violence inflicted on students by others, or other students. However, teachers felt a dilemma between the situation surrounding the students and the time available for sex education. The findings suggest the necessity of establishing a method of sex education that helps respond to the behavioral changes experienced by students based on the specific condition of each student in the limited time available, sharing understanding and insights among teachers, and ensuring cooperation with the staff of dormitories.